

会報 札幌くらぶ

2021年 11月 第95号

編集・発行／札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付
ホームページ <http://sakyoclub.net/sakyoclub/>

第31回札幌くらぶサロン

楽しいお話と堪能したアーカイブ

10月17日、約9か月振りに札幌くらぶサロンが開催されました。ようやく開催に漕ぎつけたサロンでしたが、予定されていたミニコンサートが諸事情から止む無く中止となり、今回のサロンは札幌くらぶ顧問の八木幸三先生の「定期演奏会プレトーク」のみとなりました。

今回は10月から来年3月までの定期や名曲がテーマです。まず「曲当てクイズ」が出されました。伊福部昭の「ゴジラ」と思いきや彼の作曲ではあるものの「ゴジラ」より6年も前に作曲された喜劇映画「社長と女店員」に使われた曲だとのこと。さらに同じ頃に作曲した「ヴァイオリン協奏曲」も似ているのです。伊福部は同じモチーフでいくつか作曲しているらしく、それは伊福部がその頃勉強していたラベルのピアノ協奏曲に影響を受けたのではないかとのこと。実際に聴いてみると確かに似ています。



当日の参加者は27名

さて、ここまでのお話は、来年1月の定期演奏会の伊福部昭作曲「ヴァイオリンと管弦楽のための協奏風狂詩曲」に繋がるのです。「ゴジラ」を見つめることはできるでしょうか。

札幌の演奏を聴きました。なつかしい調べにしばしエリシユカさんに思いを馳せました。

映画の音楽が続いたところで、劇伴音楽からバレエに繋がり、「ロメオとジュリエット」のアーカイブへ。2007年の尾高忠明指揮のプロコフィエフと2013年の高関健指揮のペルリオーズの「愛の場面」の演奏を聴きました。

次のテーマは、「北欧の音楽」です。来年3月の定期の3曲はいずれも北欧の作曲家の曲で、指揮者のインキネンもフィンランド出身。ここで演奏予定のシベリウスの「交響曲第5番」を、2000年4月の岩城宏之指揮

のアーカイブで。冒頭のホルンやフルートなどの調べにその当時の札幌の演奏者を懐かしむ声がか会場からあがりました。

そしてフィンランド繋がりでピアノリストの館野泉さんのお話になります。「左手のためのピアノ珠玉集」を取り出し、「実はこの中に僕の作曲した曲も載っているんです」とのこと。あるコンサートでの打ち上げで、館野さんから左手のピアノ作品の委嘱を受け、その話の中でお酒が大好きなことがわかり、「何を飲まれているのですか？」と聞いたところ、「泡盛をロックで！」との返事。そこで生まれた曲「泡盛オンザロック」を館野さんに献呈したのだそうです。この曲集のCDも発売されていて、幸運なことにもその泡盛の曲を聴かせていただきました。左手の曲とは思えないタッチの素敵な「ロック」。八木先生曰く「この曲は両手でも難しいんです！」

最後に司会の上野さんからは非にとリクエストのあった歌劇「ノンノ」(8月22日公演)のお話をいただきました。原予修原作、八木先生作曲の縄文オペラ。オール北海道のオペラ公演は初めてで、曲作りよりも公演するのが大変でしたとのことですが、「ノンノ」のスコアは電話帳2冊分も。作曲してしま

うと自分の手から離れて、演出家、演出補、舞台監督など大勢の人の手が入り、お金もたくさんかかり、その中で曲の書き換えもあったり、それでも妥協できない部分もあったり。コロナで1年延期となった公演も、観客を50%にせざるを得なくなりましたが、でも反響はとて良くと、再演を望む声も。実際に鑑賞した会員の中からも「素晴らしい！」「感動した」との声がありました。今のところ再演は難しいようですが、DVDが出ると予定だそうです。

会員/定政みち子

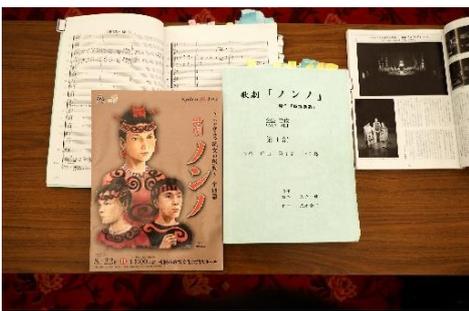


「泡盛オンザロック」のCDを手に

次は、アニメ映画「ハウルの動く城」のテーマ曲とドヴォルジャークの交響曲第8番の第3楽章が似ているというお話。拍と音型が同じなのだそう

です。ここで2013年のエリシユカさん指揮の

歌劇「ノンノ」のスコアとパンフ



歌劇「ノンノ」のスコアとパンフ

1月〜2月 定期 新・定期 名曲 演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三（札幌くらぶ顧問）

第642回定期演奏会
1月29日（土） 17:00
30日（日） 13:00
指揮 マティアス・
バーメルト
ヴァイオリン 山根一仁

■ベルリオーズ

「ロメオとジュリエット」 より「愛の場面」

「この曲はコンサート形式のオペラでもカンタータでもなく、人間の声を多用する合唱を伴った交響曲である」と作曲者

自身が楽譜に記している。『幻想交響曲』や『イタリアのハロルド』などの作品同様、この曲は交響楽に演劇性を取り入れたものだが、ベートーヴェンの第9交響曲のような規模や様式がさらに自由に拡大されて、多様性を持ったシンフォニーとなっている。

第3楽章で演奏される「愛の場面」は、管弦楽による「19世紀における最も美しいフレーズ」が奏でられ、その音楽語法は『トリスタンとイゾルデ』など後のワグナーオペラにも多大な影響を与えた。

■伊福部昭

ヴァイオリンと管弦楽の ための協奏風狂詩曲

この曲を聴くとどこかで聞いたことのある旋律が耳に飛び込む。そう「ゴジラのテーマ」だ。伊福部はゴジラの映画音楽を担当する6年前にこの作品の原曲となった「ヴァイオリンと管弦楽のための協奏曲」を作曲した。

この曲は2度改訂されているが、初演当初は緩徐楽章がある3楽章構成だった。しかし、作曲者の判断で緩徐楽章を省き2楽章構成にしたため「協奏風狂詩曲」となった。

■シューマン

交響曲第2番

冒頭からヴァイオリン独奏による郷愁を感じさせる抒情豊かなカデンツァ風序奏が奏でられ、徐々に管弦楽の各セクションが重なりながら伊福部節とも言える土俗的な旋律と変拍子による律動的なリズムが展開されていく。そしてゴジラが出現!!

シューマンの交響曲は、そのオーケストレーションに欠点があるとと言われることがある。確かに総譜を見ると音符の多さと休符の少なさが目につくし、管楽器と弦楽器で同じ動きが多く、まるで吹奏楽と弦楽合奏が同時進行している部分もある。しかし、彼の詩的な美しい旋律がそうした管弦楽法から柔らかな響きを放って、聴くものを虜にしてしまうのも事実。実質的には3番目の交響曲としてつくられたこの曲も、終楽章など俯瞰的に聴くと管弦楽の多層的な味わいが堪能できる。シューマンは、この作品を書いている頃かなり精神的に苦悩していた。しかし、クララと共に対位法と

フーガを研究した成果がうかがわれ、弦のきこみが多く、木管とのバランスは難しいものの、旋律の棲み分けは堅実で、金管も効果的に扱われている。第2楽章の管と弦の競演による高揚感や第3楽章の木管重奏も聴きどころが多い。



松本宗利音

新・定期 第8回
2月17日（木） 19:00
指揮 松本宗利音
ホルン 山田 圭祐

■藤倉大

グローリアス・クラウス

藤倉大は、今世界で最もその作品の演奏頻度が高い作曲家の一人。現在44歳の彼は15歳で単身イギリスに渡りドゥヴァーの高校を卒業後、トリニティ・カ

レッジ・オブ・ミュージックでダリル・ランズウィックに師事。キングス・カレッジ・ロンドンで学位を取得し、ロンドンを拠点に活動を展開する異色の作曲家。この作品は、名古屋フィルハーモニー交響楽団のコンポーザー・イン・レジデンスとしての委嘱作品として書かれ、腸内細菌をテーマとした作品。2016年から2017年にかけて作曲され、ケルンWDR交響楽団がケルンフィルハーモニーホールにて世界初演した。第67回尾高賞を受賞している。



マティアス・バーメルト

© 藤井 泰生



山根一仁

© 三浦興一

■モーツァルト

ホルン協奏曲第4番

モーツァルトの気のおけない友人だったロイトゲープはザルツブルク宮廷楽団のホルン奏者。モーツァルトの4曲のホルン協奏曲は全て彼のために書かれた。彼は優れたホルン奏者であったが、モーツァルトはお人好しの彼をいつもからかっていたようだ。のちにモーツァルトの父レオポルドとともにチーズ業を営み、成功して天才モーツァルトよりはるかに裕福な生活

を送ったという。

第4番の協奏曲は、作曲家の円熟期の作品として、個性的な主題法、ピアノ協奏曲にも通ずるような意欲的な楽曲構成など、巨匠の巧まざる充実ぶりを示す逸品。当時のホルンは「ヴァルトホルン」と呼ばれる無弁の楽器だったが、半音奏法を中心にかなり高度な演奏技巧を要求していることもこの曲の特徴で、札幌首席奏者山田圭祐がどんなモーツァルトを聴かせるのか今から楽しみだ。



© K.Seki

山田圭祐

■ベートーヴェン

交響曲第3番「英雄」

第3番は、規模が非常に大きく古典派の概念を越える進歩的で劇的な作品。

ベートーヴェンに悲劇が訪れ、「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれた時期に作曲されたこの作品は、ナポレオンへの

献呈を前提としてつくられ、極めて精神性の強い作品となった。それは、第1楽章冒頭でいきなり2つの主和音が鳴ったり、

第2楽章で葬送進行曲が配され終楽章には、自作「プロメテウスの創造物」の主題が変奏されるなどベートーヴェンの強い意志が込められている。この作品によって交響曲というジャンル

は、娯乐的な音楽から作曲家としての評価をも判断するような芸術的支柱となっていた。

名曲コンサート

2月26日(土) 14:00

指揮 マックス・ポンマー
ピアノ 金子三勇士

■J.S.バッハ

ブランデンブルク協奏曲 第3番

第3番

いつの時代にも就職活動は大変であるが、バッハはそれまで仕えていたケーテン侯レオポルトの音楽熱が冷め、宮廷楽団も縮小される事態となり、新天地を求め辺境の貴族に作品を献呈して就職を有利にしようとしていた。ブランデンブルク公に献呈するにあたっての書面から

も、その意図が伺える。

6曲からなるこの協奏曲は、当時として考えうるあらゆる楽器編成の可能性を動員し、また楽想のたくみな連用によって、当時の貴族はもちろん現在の聴衆をも魅了させる傑作となった。

今回演奏される第3番は、実際はヴァイマル時代に第6番とともに2番目に書かれた。コンチェルト・グロツンとしては型破りで、独奏部と合奏部の区別がなく、各楽器が互いに両者になりあつて、反響的効果をだすことをねらっているようだ。

■ベートーヴェン

ピアノ協奏曲第4番

作曲家円熟期のいわゆる「傑作の森」の中で書かれたこの曲は、それまでの古典派音楽の協奏曲の様式や概念を超えたロマン派音楽の協奏曲を予告するよ



© Ayako Yamamoto

金子三勇士

われている。彼は長い苦悩の中でつくった第1番の完成直後、第2番をわずか4ヶ月で書き上げた。驚異的な速さで書き上げられたひとつの理由として、音楽の発想や着想が第1番の作曲中にすでにあり、第1番で収納できなかったものを直ちに第2番として展開したからなのかもしれない。

1877年の夏、ブラームスは、はじめて訪れたペルチャッハ(オーストリアにある有名な保養地)でこの曲を作曲している。アルプス山麓のヴェルター湖を眺望できるこの地は、ブラームスにとつて桃源郷のような地であつたらしく、ハンスリックに宛てた手紙には「ここでは旋律がこんなに沢山生まれてくるので、散歩の時、それを踏みつづぎないように気をつけないといけない」とまで書いている。牧歌的な美しい旋律が何の誇張もなく展開され、職人技ともいえる作曲技法とのびのびとしたオーケストレーションによるブラームスの魅力が堪能できるだろう。



© 藤井泰生

マックス・ポンマー

■ブラームス

交響曲第2番

ブラームスの交響曲第1番と第2番は、対をなしていると言

(写真協力 札幌交響楽団)

楽員さんに興味津津 ⑳

トランペット奏者 小林昌平さんに聞く

♪ ラッパの世界に引き込まれて

山口県下松(くだまつ)市という町で生まれ育ちました。学校では学級委員長を務めるような真面目(まじめ)な子どもでした。三人姉弟の真ん中(なな)の子で、学校では先生の顔を伺(うかが)い、家では親や姉弟の様子を見て、いつもその空気を読みながら行動するよう

な子どもでした。

小さい頃から音

楽が好きだったの

で、小学校4年生

の時に友達と吹奏

楽部に見学に行き

ました。その中でひとときわかつくよくて輝いて見えたトランペットに一目惚(めぼ)れして、トランペットを始めることになりました。みるみるうちにラッパの世界に引き込まれて「今日はこの音まで出た!」今日はこの曲を吹いた!など、宿題になっていた日記のほとんどがトランペットの練習内容になっていたほどでした。

県内にはオーケストラや音楽

大学などはありませんでした

が、2年に1度、東京の某オーケ

ストラが町に来てコンサートや講習会を開いていました。そこで初めてプロの音楽に触れ、それが音楽への道を志すきっかけとなりました。

今では下のパートを吹くこと

が自分の役割ですが、大学を卒

業するまでは上のパートしか吹

いたことがありませんでした。

今とは演奏スタイルも随分と違

い、人に合わせて演奏するとい

うよりは、自由気ままな演奏を

していたと思います(笑)。

大学を卒業して上京し、仕事

をしていく中で、音色的にも性

格的にも、自分本来の適性は2

品を吹いているときにあること

♪ 札響の持つ「音の透明感」

に気付き、下を吹くことにやりがいを感じるようになりました。小さい頃の性格が今の演奏

につながっているように感じます。

学校を卒業してからはフリー

ランスとして都内で演奏活動を

していました。20代のうちにオ

ーケストラに受からなければ楽

器を仕事にすること

を諦めるつもりで、ス

ケジュールの合うオ

ーディションには全

てトライしてしまし

た。20代最後となる

タイミングで札響の

オーディションがあ

り、念願叶って合格す

ることができました。

私の試用期間が始

まる直前のコンサ

ートで、初めて札響の演

奏を生で聴きました。それは私

の前任者である前川さんが出演

する最後のコンサートでした。

「軽騎兵」冒頭の2本のトラン

ペットがユニゾンでびたりと合

つていて、まるで一人で吹いて

いるかのように聴こえたことを

♪ 育児と練習は交代しながら

個性豊かで様々な音楽性を持つている楽員の皆さんですが、音色の核となる部分にはどこか共通のものがあると思います。各楽器、各セクションの音色に統一感があり、札響の持ち味である「音の透明感」へつながっているのではないかと、個人的には感じています。一日も早く、3人の素晴らしい先輩トランペット奏者の持つサウンド感到にも近づけられるよう、より一層研鑽を積んでいきたいと思いま

す。

趣味はワッペン(わっぺん)の収集です。

見かけによらず、小さくて可愛

らしいものが好きなので、可愛

いワッペンを見つけては購入し

て、白いシャツにアイロンで貼

り付けて着ています。私服姿の

私を見かけた時は是非、胸元を

チェックして見て下さい!

音楽を続けていきたいと早い

段階から考えていたので、音楽

家になっていない未来を思い描

いたことがないですが、トラン

60年という歴史の一部を創ること



プロフィール

2012年、愛知県立芸術大学 音楽学部 音楽科 楽器専攻(管打楽器コース)卒業。2年連続で成績優秀学生として表彰され、尚美ミュージックカレッジ専門学校 コンセルヴァトール・ディプロマ科を首席で修了。トランペットを亀島克敏、武内安幸、服部孝也、栃本浩規の各氏に師事。2019年1月より半年間の試用期間を経て、2019年7月1日付で札幌交響楽団に入団。



小学校1年生 姉弟3人で



小学校4年生
初めての吹奏楽部のコンサート

札幌創立60周年に寄せて

札幌は今年創立60周年を迎えました。「還暦」を迎えた札幌に会員からお祝いの気持ちを込めて、「札幌への思い」を綴っていただきました。

札幌 おめでとう そしてありがとう

私(達)の札幌が還暦を迎えた。創設2年目、私は中学2年。帯広で私は生まれて初めてオーケストラの生音を聴いた。札幌との出会いだ。爾来、札幌は「私の札幌」となった。「アイネクライネ」の嫺(たお)やかな弦楽と「エロイカ」の重厚な管弦楽が織りなす響きは、私の人生を豊かにする決定的な要素となった。

この60年という長きにわたり、私と同じように札幌と出会い、札幌と共に音楽の神々と交わり人生の彩を享受できた人々がどれほど大勢いたことだろう。この街に札幌を創設した人々、魅力的なマエストロ、歴代の情熱豊かな楽員と、楽団を支えてきた事務局の皆さん方に、心からの「ありがとう」を申し述べたい。

演奏が終わるたびに私達聴衆が放つ感動の拍手。安堵と達成

会長／上田文雄

私と札幌 ― 団員であったことを誇りに ―

去る9月11日(土)に札幌コンサートホールKitaraで開催された創立60周年記念第640回札幌交響楽団定期演奏会を聴きに行つて来ました。曲目はシュベルトの交響曲「未完成」とブルクナーの交響曲第7番でした。この日の首席指揮者のバーメルトさんと札幌の演奏は素晴らしく、洗練された荘厳な響きは世界にも誇れる程のレベルの高い演奏であったと思えます。

私は23歳で札幌に入団し、60歳で定年退職致しました。その間に札幌ヴァイオリン奏者であった今の妻と結婚し一緒に子育てをしながら37年間在籍し、人生の約半分は札幌と共にありました。今年で定年退職してか

ら約10年になりますが、今では毎月の札幌定期演奏会を聴きに行く事が我が家の楽しみな行事の一つとなっています。私が入団した時はペーター・シュバルツさんが常任指揮者でした。その後、指揮者は岩城宏之さん、秋山和慶さん、尾高忠明さんと変わって行きましたが、各時代ごとにオーケストラも鍛えられ、磨かれて行きました。まだ若かった私も団員もそれぞれの指揮者の要求に応えるべく必死に勉強し、成長できたと思えます。

また、海外公演は札幌の姉妹都市、ポートランドとミュンヘン、2度の東南アジア、英国、韓国、ヨーロッパ公演がありました。これらは楽しくも貴重な体験となり、飛躍の為の大きな原動力になったと思います。

定期演奏会のホールも最初は以前の札幌市民会館や厚生年金会館でしたが、札幌コンサートホールKitaraが出来て良い演奏環境になり、在団中ここ14年間も演奏できたことは幸運でした。また、札幌は財政危機に陥つたこともあり、皆で頑張つて何とか乗り越えたことがありました。今はコロナ危機の最

キタラができた頃の演奏会



民の温かい応援等心強い支えがありますので、皆で力を合わせてこの難局を乗り越えてほしいと願っています。私はいつも身近に札幌の名演を聴きに行くことができる幸せに感謝すると共に、かつて札幌に在籍していた事を誇りに思い、これからも益々発展して行くことを祈っております。

元札幌首席ティンパニ・打楽器奏者

会員／眞貝裕司

3000円で得た癒しの時間

テレビもステレオも備わっていない殺風景な部屋での一人暮らし。学問の世界への好奇心とその深淵に触れたいという夢を大きく膨らませながらも、読書だけが唯一の娯楽だった学生時代、1年に数度の札幌定期演奏会は下宿部屋以外で味わう心のオアシスであった。

中味の頼りない財布から300円を握って、僕は札幌市民会館に足を運んだ。1969年当時、定期では山岡重信が指揮を担うことが多かったが、きびきびと音楽を進める氏の現代的な感覚が僕は好きだった。霞みがかったような音色が魅力のオー

会員／村岡範男



2001年英国公演で

札幌との出会い ― 終生の大ファンの誕生 ―

札幌交響楽団の第1回演奏会を聞いたのは60年前、中学2年生のときでした。これからの記述で多少の間違ひがありましたら、昔のことで何卒ご容赦くださいたいと思います。指揮者は荒谷正雄先生。荒谷先生とは後年、札幌音楽院で親しくお話ししましたが、穏やかな大先生、そして戦前のドイツ・オーストラリアを彷彿とさせるGentleman。



札幌名誉創立指揮者 荒谷正雄氏

第1回定期演奏会の曲目にバッハ、モーツァルト、シューベルト、ベートーベンを選ばれたのもうなずけます。コンサートマスターは岩本敬一郎さん。長年、佐々木一樹さんと思っておりましたが勘違いでした。佐々木さんは札幌市民会館で小林道夫先生のピアノでリサイタルを開いて

て印象深かったのです。十余年前、友人たちと熊本で演奏会を開きました。その時のピアノは小林先生。「自分は、もう後期高齢者だよ」と話しておられましたが、今や私もその年代です。奥様は札幌の方でした。

中学生の私が一人でチケットを買って演奏会に行ったとは考えられないので、父に連れられて行ったのでしよう。父(サラリーマン)は祖母の影響で音楽好きでした。戦前、東京で学業の傍ら東京音楽学校選科に在籍し、著名な作曲家に師事しておりました。戦争で中断しましたが、そのことを父は終戦後とても誇りにしておりました。家にLPレコード、「世界大音楽全集」「音楽辞典」も一揃えありました。しかし、聴くのはピアノの曲ばかり。

生のオーケストラはこの時はじめて聴きました。父が「オーケストラの人は立派な方ばかりなんだよ」。私は「皆、高そうな楽器を持って、外車に乗っている団員もいて、カッコいいな」と子供心に思っていました。N高に行くとオーケストラに入る希望(私は中学校の吹奏楽部でクラリネットを吹いていた)が、学区の再編成でM高に入りまして。オーケストラへ入団する最初の夢は遠のき、「終生の大ファン」の誕生でした。

会員／松本良一

ハンカチを2枚持つて

札幌の第1回演奏会を聴いた人はいま何人くらい演奏会に来ているだろう。私の街に交響楽団が出来た！文化都市サッポロは夢ではないのだ。あれから60年どれだけ私の心の支えだったことか。

すると札幌に入団できたことをとても喜んでいて、全国でも憧れのオーケストラだという人もいます。世界中から一流の指揮者がおいでになりどんどん進化していく。

個人的に指揮者ではエリシユカさんが好きだった。同じ曲でも指揮者で違うことに目覚めたのも、音楽を聴いて涙が流れたのも彼が初めてだった。彼が指揮をするときはハンカチを2枚持つて行った。

私の一番心に残る演奏会

60周年本当におめでとうございませう。

私の一番心に残る演奏会は、2011年に行われたヨーロッパツアーでしょうか。イタリア、イギリスなどを廻って演奏を行い、チャイコフスキーの悲愴やブルッフのバイオリン協奏曲を披露しようです。ブルッフについては、諏訪内晶子さんの名演奏で会場を湧かせたそうです。私もキタラでの凱旋公演を聴きました。諏訪内さんの右肩

斜め後方から演奏を見守りましたが、終了後は万雷の拍手となり、あの小さな楽器一つにこんなに大勢に喜んでもらえる力があるのだなあと、改めて感動いたしました。

もう一つは、神尾真由子さんがチャイコフスキーコンクール優勝後まもなくジルベスターコンサートに出演され、ショーンンの「詩曲」を見事に披露されたことです。1階の良い席で聞きました。隣の女性も「うん！

こんな素晴らしいバイオリン、聞いたことないわ！」と感激の声を漏らされ、私も全く同感でした。

どの演奏会も満遍なく聞く、というより、好きなソリストが来られる時に良い席で聞くという偏ったスタイルですが、楽員さんのレベルが年々高まっていてオケのみの曲にもいつも満足して帰ります。ロビーでの仲間との交流も楽しく、これからも未永く良い音楽を聞かせてほしいです。

会員／及川恵

のに、2017年秋が最後の来日と聞いた時はチエコがすごく遠い国に感じた。

最後の演奏会が終わったとき、まるで片想いのあこがれの人が遠くへ行ってしまふような寂しさと哀しさで2枚のハンカチが大いに役に立った。言うまでもなくCDは全部持っている。生誕90年の特集記事を読みながらしんみりとCDを聴いている。秋のサッポロで…

会員／井上明子

(写真協力 札幌交響楽団)



札幌第1回定期演奏会(1961年9月6日)



第604回定期演奏会(2017年10月28日)

知的でクールなブルックナー

まずは、冒頭のいわゆる「ブルックナー開始」に全神経を集中。聞こえるか聞こえないかのヴァイオリンのトレモロが原始の森を彷彿とさせる情景を描きだす。自然への讃歌、そしてそれがチェロとホルンによる、悠揚迫らぬ第1主題の提示によって宗教心にまで昇華される。僕は瞬時にブルックナー・トーンの魅惑の園にいざなわれた。世俗から離れた世界に漂うような感觸の、素敵な滑り出しである。

かつて音楽評論家の宇野功芳氏は「ブルックナーの音楽は人間臭さから最も遠い距離にある」という趣旨のことを書いておられた。なるほどの確かな形容だなあ、と感じたものだった。



第640回定期演奏会(2021年9月11日)

(写真協力 札幌交響楽団)

がさらに敬虔な祈りの心を強調する。これもブルックナー音楽の醍醐味であろう。やがて音楽は僕の大好きな、ヴァイオリンによる息の永いモデラートの第2主題につなげられる(手持ちのオイレンブルク版のスコアで37小節以降)。交響曲第7番の一番の聴きどころである。

1年7か月ぶりに札幌交響楽団の指揮台に立ち、ひととき暖かい拍手で迎えられた首席指揮

者のパーメルト氏はこのフレーズはもとより、全体的にも極めてクールで、知的な感じ取りに徹した。旋律の抒情性に我が身を埋没させることを意識的に避け、むしろ即物的に透明感を浮き上がらせようとする意図がうかがいしれた。こうした手法はワグナーの濃厚な音楽には場違いな印象を与えるのかもしれないが、ブルックナーにはむしろ適していたものと思われる。新鮮な清涼感が心地よい。

最初に演奏された、「未完成交響曲」は第2楽章冒頭の、ホルンによる5度、6度の和音など、もう少しデリケートなニュアンスが欲しかったものの、おしなべて引き締まった音像が印象的であった。第1楽章提示部を繰り返したことに、この指揮者の構成美追及への強い意思がこめられていた。

ともあれ、久しぶりにブルックナー・トーンに身をあずけた土曜の薄暮、作曲家最高傑作である交響曲が発するメッセージに、現実の喧騒から逃れ、心が洗われる思いであった。あれだけ多くの楽器を用いているにもかかわらず、モノ・トーンの響きが心地よいとともに、第2楽章第2主題の旋律が心の中でいつまでも反復された。

美醜も人間の生死をも超越した、透明な抒情が素晴らしい。

会員/村岡範男

翔(はばた)け札幌!

創立60周年記念 第640回定期演奏会

世界の主要都市には必ずプロのオーケストラが在り、オーケストラは地域文化を象徴し都市のステータスでもあります。そして私たちの札幌には札幌交響楽団(札幌)が在ります。市民の創意によって誕生し今年創立60周年を迎えました。放送局や企業、自治体の所有ではなく、私たち市民のオーケストラとして札幌の発展と共に成長してきました。

音の重なりや響きに豊潤さを増してきました。認知度も向上し、今年の「音楽の友」誌によるアンケート「あなたが好きなオーケストラ」では、国内や海外の著名なオーケストラと肩を並べて、18位にランクインし注目されました。もはや札幌、北海道だけのものではなく、なると言ってもよいでしょう。札幌くらぶの会員にも道外の方が11名いらっしゃいます。

技術指向に陥らず音を大切に、北海道のテロワール(土地の風土や個性)を感じさせる稀有なサウンドを創り上げ、近年は

記念の定期演奏会はパーメルトの一年半ぶりの登壇が叶い、ブルックナー選暦の交響曲第7番で祝いました。弦楽器の爽や

ある交響曲が発するメッセージに、現実の喧騒から逃れ、心が洗われる思いであった。あれだけ多くの楽器を用いているにもかかわらず、モノ・トーンの響きが心地よいとともに、第2楽章第2主題の旋律が心の中でいつまでも反復された。

美醜も人間の生死をも超越した、透明な抒情が素晴らしい。

会員/高木誠一

スタッフの声

▼60周年記念演奏会はブルックナー7番。満を持して二週間自粛隔離後のパーメルトさんが指揮台に立った。ワグナー・チューバの4本は聴ける機会が少ない。柔らかな響きに感じました。青い空に一本の飛行機雲を描くような9本のホルンの編隊飛行。モーツァルトに比べ、僕個人としてはやや重い印象のあるブルックナーですが、二種類のホルンは曲を華やかにして親しみを与えてくれました。(爽)

▼札幌との出会いは中学2年の時だった(と思う)。全校生徒が市民会館で札幌の演奏を聴いた。「音楽教室」と呼んでいたかもしれない。曲は「田園」だったが、その時初めて聴いた。その後、親の知り合いだった「維持会員」の方から時々チケットをいただいたりして、定期演奏会に足しげく通った。若かりし頃のバリー・タックウェル、オーレル・ニコレ、アンドレ・ワッツ、マルタ・アルゲリッチも登場した。アルゲリッチ(当時の呼び方)からは、他の大勢の聴衆と一緒に楽屋に押しかけてサインをもらった。(村山)